

中年期主婦のむなしさとそれに影響を及ぼす要因の検討

Emptiness of Middle-aged Housewives and its Related Factors

中 島 美佐子

Misako NAKASHIMA

(日本女子大学大学院人間社会研究科 心理学専攻博士課程前期修了)

要 約

中年期の主婦は空虚感や抑うつ感のような不定愁訴を抱えやすい。本研究では、中年期の主婦が持つむなしさやそれに影響を及ぼす要因を検討する。協力者は30代から60代の中年期主婦579名で、むなしさ・対人関係性・家庭生活・人生に関する考え方などについてインターネットによる質問紙調査を行った。その結果、60代は他の若い世代と比べてむなしさが低いことが分かった。また全世代共通でむなしさに影響を与える要因は、人生キャリア成熟の低さ、閉鎖性・防衛性の強さ、他者への依拠の強さだった。特定の世代の特徴も明らかになった。たとえば、30代では夫婦関係がよくない人、子どもの数が少ない人、ありのままの自己を受け入れる人でむなしさが強かった。

[Abstract]

The purpose of this study was to investigate emptiness of middle-aged housewives and its factors. Survey respondents (N=579) were housewives between 30 and 69 years old, who were members of an internet survey company. Questionnaires about emptiness, personal relationships, family life, and concern about her life were conducted by the Internet. As a result, the people in their sixties had lower emptiness than any other younger generations. Besides one of the factors related emptiness was low degrees of a planning ability for her life. Other factors were the strength of closed nature and that of dependence on the others. Also, the survey showed the character of each generations. For example, the people in their thirties who didn't have good relationship with her husband, had a few children and accepted just as she was, had strong emptiness.

1. 問題と目的

中年期主婦の精神的健康

主婦とは、もともと無職で家事に専念する“専業主婦”を指す。1980年代以降は働く女性が増え、現在では元の意味の専業主婦は減ってきている。しかし、厚生労働省の統計(2011)によると、妊娠前に就業していた妻のうち、出産後も継続就業する妻の割合は38.0%(2000年代後半)となっており第1子出産後の妻の継続就業は依然として低い状況にある。子育てがひと段落すると40歳代の就業率は80%近くまで回復するが、非常勤職が60%強である(総務省統計局, 2012)。非常勤職が多いのは、雇用者側が離職期間の長い女性は職業蓄積に乏しいため常勤職と

して採用しないことが多いこと(国民生活白書, 2006)と, 女性側が再就職する場合も家庭と両立できる仕事を求める人が多いこと(仲野, 1997)が背景にあるだろう。また, 一度仕事を中断すると再就労時には初職と比較して条件が大幅に低下するため, 高学歴の女性ほど再就労しない傾向が見られる(真鍋, 2004)。したがって, 中年期女性は常勤既婚女性より無職とパート労働などをする主婦が多い。

中年期女性は, それまでの人生を振り返り転換点に立たされる時期と言われるが, 後半の人生を新たに上手く歩めない女性がいるとも言われる。中年期女性についての永久(1998)の調査からは, 「将来やりたい事が見つからずに焦る」とか「今のままの生き方でいいのか不安だ」などの項目の評定は, 専業主婦群の方が常勤女性群より有意に高いという。中年期において常勤女性より専業主婦は社会から取り残された焦燥感を感じることが多く, 自分らしさやアイデンティティを確立できにくくなっているという研究もある(岡崎・柏木, 1994; 清水, 2004 ほか)。松浦(2006)は, 成人女性において就労役割及び社会活動役割からの精神的健康への寄与は認められないことを示している。以上のことから, 中年期の生き方により高齢期になった時の精神的健康に影響が出る可能性もあるのではないか。

中年期主婦とむなしさ

岡本(1994)は, 子どもの自立による母親役割の喪失感, 時にアルコール依存症, 空虚感・無力感・抑鬱感のような不定愁訴の背景になりうるという。永久(1998)は中年期の専業主婦は, 個人としての生きがいを持っていない不安や焦りというストレスを感じる人が多いという。下地(2010)も, 専業主婦には社会に取り残されたような寂しさや焦り, 達成感がないなどの気持ちを抱える方も多いという。岡本(2002)は, 母親役割の喪失感と精神的健康との関連を指摘している。このように家庭において母の役割を終え喪失感を感じたり, 社会的な役割を得られず達成感がないなどの心理的状態は, 堤(1994)が実存的空虚感を「むなしさ」と定義したことに似ていると思われる。しかし, 成人女性の精神的健康の発達研究においては, 日潟・岡本(2008)や日潟(2012)のように日本版 GHQ 精神健康調査票 30 項目版(中川・大坊, 1985; 以下, GHQ と呼ぶ)が使用される研究が多い。

今までの研究は健康と病気のどちらとも言えないむなしさのような微妙な状態について調べているとは言い難いと思われる。しかし, 平山(1999)が専業主婦のネガティブな心理的状態と個人化欲求の充足・実現度との関連を探ることが必要と述べている点を勘案すると, 臨床的に健康・不健康な人の違いを見つけ出すのにむなしさの観点から探ることは, その研究考察を受けると考えられる。中年期主婦のむなしさを検討することは, 将来病的なものへと移行するかもしれない微妙な心理的状態を検討することになる。したがって, 中年期主婦とむなしさについて調べることは意義があるのではないかと考えられる。

対人関係性とむなしさ

自分の人生をどう生きるかを検討する際には, 高井(1999)は他者との関わりなしに生きることが出来ない所以对人関係性の次元を検討していくことは重要だという。高井(1999)の結果, 中年期において, 閉鎖性・防衛性の強い人は, 人生に目標や意味を見出している度合いも低いことが

示されている。そして、ありのままの自己を生きようとする姿勢を持っている人は、人生を主体的に生きることが出来ており、そのような生き方態度は中年期以降の女性において著しく強まっていくという。このことから、閉鎖性・防衛性やありのままの自己の度合いは、むなしさや人生の充実度に関連があると考えられる。

中年期女性の対人関係性に関する研究は、高井(1999)の研究の他には筆者の知る限り見当たらない。また、むなしさの概念の研究は堤(1994)の青年期を対象として尺度を作成したにとどまっている程度である。このことから、中年期主婦のむなしさとそれに影響を及ぼす要因の検討を行うことは意義があると考えられる。

家庭生活における気持ちや行動とむなしさ

中年期主婦のむなしさを検討する時、主婦が居場所の中心としてきた家庭生活のことや社会的活動のことを考慮することが必要だろう。人が充実感を感じることが出来るためには、ボランティア活動や社会活動などの行動を起こしていることが重要(高井, 2011)だからである。よって、何か社会的な活動をしているか、それにより満足感があるかを尋ねることが必要(永久, 1998)だろう。また、夫婦関係が良好かどうかも中年期女性のむなしさに関連があると思われる。夫との関係は中年期女性の揺らぎを見るうえで欠かすことのできない要因(東原, 2003; 松浦, 2006)と言われるからである。

このように、家庭生活における気持ちや行動がむなしさに影響を及ぼすか検討することは、中年期主婦の精神的健康を保つ要因を探る上で意義があると思われる。

自分の人生に対し関心性・自律性・計画性を持ち、個人の目標に価値をおく中年期主婦

岡本(2002)は、中年期は母親役割が縮小する時期であると同時に、子育て後の人生をよりよく生きるため、母親役割以外の役割を模索する時期だという。高井(2000)は、40代以降の人生に目標があることは日々の生活にメリハリをつけ、自己をコントロールし、充実して生きることにつながるという。また東山(1983)は、新しい自分への再生の道を一人一人の中年期女性が模索することを求められるという。以上から、現代は中年期女性も自己の意思と責任のもとに、より良い生き方を創造していく「主体的キャリア形成力」が要請される(坂柳, 1999)だろう。これに関連して、中年期主婦が自分のやりたい事を強く求めているかどうかという研究もある。柏木(2003)は、女性が自分のやりたい事を求めるという個人化傾向を強めてきたのは、社会経済的変動・長命・少子化をまず要因に挙げる。さらに、高学歴化が家事・育児以外のものへの意欲を強め、社会的職業的経験はそれが達成される充足感や社会での存在感を体験させ、女性の中に「個」というテーマがクローズアップされてきたという。田熊・伊藤(2008)は、中年期の主婦は「個」を大切にしたい生き方、つまり自身の積極的な行動が肯定的な自己評価へとつながるという。

以上のように、中年期主婦の中でも40代は残りの人生を自分のためにといろいろと考える人が増えてくるのだろう。これは、上記のような先行研究から、40代主婦が現状に満足せず本当の自分を確立したいと考える人が多いと仮定されるからである。一方で、時間的制約、家庭の収入、個人の能力などから具体的な行動がとれないということが、むなしさの助長につながるかもしれない。

本研究全体の問題・目的

以上より、中年期主婦は個人としての生き方を持てない不安や焦りが、他の世代や常勤職女性より多い(永久, 1998)。さらに妻や母親の役割を失った時の喪失感や、社会的所属がないための社会的役割における達成感のなさは、アルコール依存症、空虚感・無力感・抑うつ感の様な不定愁訴の背景になりうる(岡本, 1994)。また、対人関係性において人に対して心を閉ざす傾向が強い人は、人生に目標や意味を見出している度合いが低い(高井, 1999)。中年期主婦のこのような心理的状态を「むなしさ」(堤, 1994)と呼べると考えられる。一方で、中年期主婦は、自分自身の目標を大切にしたい生き方が肯定的な自己評価になる(田熊・伊藤, 2008)。そのため、家族のために我慢してきたことをやりたいとか、自分を確立したいという中年期主婦がいるだろう。したがって、むなしさを感じる中年期主婦がいると思われる半面、自分の人生に関心性・自律性・計画性を持つ人もいると思われる。人生に対する関心性・自律性・計画性を持つ人は、個人の目標に価値をおいて行動をとる人かもしれない。

そこで本研究では、予備調査と本調査に分けて主に中年期主婦のむなしさについて検討する。まず、「中年期」と「主婦」についてここで操作的に定義する。清水(2004)、井口(2011)などを参考にして、本研究では40代と50代を「中年期」とする。また、「主婦」とは既婚で家事労働に専念する無職またはパート・アルバイトの女性とする。

予備調査では、青年期対象に作成された堤(1994)の「むなしさ」感尺度を用いて中年期主婦のむなしさの因子構成を探ることにする。また本調査では、中年期主婦のむなしさ、世代間における中年期主婦のむなしさの違い、自分の目標に価値をおき行動することに影響を及ぼす要因、むなしさが強い人の傾向を検討することを目的とする。

2. 予備調査

予備調査 1

【目的】 中年期既婚女性を対象者として「むなしさ」感尺度が堤(1994)と同様の「無目的・無気力感」「孤独感」「否定的自己感」のような3つの下位尺度に分かれるかの検討を行う。また、その尺度を用いて40代主婦に属性によるむなしさがあるかを調査する。

【方法】 大学院生ほか数名に堤(1994)の質問項目に目を通してもらい、内容を検討する。その後、40代主婦を対象としてこれをもとにした質問紙に回答してもらう。

【対象者と手続き】 大学院生および大学事務職員の40代既婚女性5名に堤(1994)が作成した「むなしさ」感尺度に目を通してもらい、違和感のある表現があるかどうかチェックしてもらった。その結果、表現を修正して合計55項目とした。これを用いて、オンライン調査会社(株式会社ボーダーズ)に登録している40代主婦301名(平均年齢45.18歳, SD=2.72)にオンラインで回答者の属性(年齢・子どもの数・子どもの年齢か結婚年数)とむなしさ尺度(改変版)の質問紙に回答してもらった。

【結果】 むなしさ尺度の質問を上述の55項目(M=4.17, SD=1.48)を算出した。40代主婦に属性とむなしさ尺度の質問項目を回答してもらった。堤(1994)の尺度が3項目だったことから3因子を仮定して主因子法・Promax回転による因子分析を行った。第1因子は、自分の存在

価値に関する内容の項目が高い負荷量を示していたため、「自己に対する無価値感」と命名した。第2因子は、人生に目的を感じられるかどうかの内容の項目が高い負荷量を示していたため、「人生の無目的感」と命名した。第3因子は、一人になった時に意識が向かう内容の項目が高い負荷量を示していたため、「空疎感」と命名した。このように、中年期女性を対象者としてもむなしさ尺度は堤(1994)と同様な3因子に分かれた。項目数が44と多いため、各因子に対し因子負荷量の大きい方から10個を採用して30項目とした。Cronbachの α 係数は.91～.95であり各下位尺度は一貫した内容を持つといえる。また、属性によりむなしさに差があるのか分散分析をした。しかし、いずれも有意差が出なかった。そこで予備調査2を行うことにした。

予備調査2

【目的】40代から60代の既婚女性に予備調査1で用いた尺度を用いて対象者の属性によるむなしさがあるかを調査する。

【方法】予備調査1の結果を受けて、むなしさの研究可能性があるのかどうか検討するために世代を広げて中年期女性40代から60代の既婚女性を対象として、また属性の質問項目も増やして行った。

【対象者と手続き】オンライン調査会社に登録している40代から60代の既婚女性242名(平均年齢51.99歳, SD=7.35)にオンラインで回答者の属性と予備調査1で改正した30項目のむなしさ尺度を用いて質問紙に回答してもらった。回答者の属性は、中・高卒、短大・専門学校卒、大卒以上に分類した学歴、専業主婦、パート・アルバイトに分類した本人の職業、なし、1人、2人、3人以上に分類した子どもの数、400万円未満、400～600万円、600～800万円、800万円以上、答えたくないに分類した夫の収入、そして、なし、130万未満、130万以上、答えたくないに分類した本人の収入の5つである。

【結果】40～60代の既婚女性242名に、【対象者と手続き】で記述した属性を用いて40代・50代・60代の世代間でむなしさに差があるか分散分析をかけて比較検討した。その結果、世代間・学歴・夫の収入において5%水準において有意差が出た。また、今回対象者のうち40代のデータを用いて属性によりむなしさに差があるか分散分析をかけた。その結果、学歴と職業(会社員とパート間)において5%水準において有意差があった。

【予備調査1・2からの考察】対象者をより幅広い年代とし質問する属性を増やした予備調査2を行った結果、世代間ごとで有意差が出たために中年期主婦のむなしさを研究する可能性がある判断した。そこで、本調査においては広い意味の中年期主婦の発達について検討するために、50代主婦および老年期にさしかかる60代主婦とプレ中年期の30代主婦も対象者とする。

3. 方法

調査対象者及び調査時期

2013年9月21日～23日にオンライン調査会社(株式会社ボーダーズ)に登録されている主婦およびパート・アルバイトの30代から60代の既婚女性を調査対象者として質問紙調査を行った。有効回答は、総計579名(平均年齢49.30歳, SD = 11.10)である。各年代の人数は、30代144名(SD=2.98), 40代144名(SD=2.81), 50代144名(SD=2.67), 60代147名(SD=2.55)である。

調査内容

(1) Table1の項目に回答してもらった。

(2) 予備調査で作成したむなしさ尺度(中年期女性版)に回答してもらった。3つの下位尺度合計30項目について、「全くあてはまらない(1点)」から「非常にあてはまる(7点)」までの7件法で回答を求めた。

(3) 個人目標の価値志向項目に回答してもらった。永久(2010)は、中年期女性を対象とした個人目標の価値の実現のための行動に関するものを測定するものとして、「個人目標の価値志向」(7項目)を作成した。この7項目を質問することにより、中年期女性が個人目標に価値をおくことを実際に行っている(いた)かを調べることができる。回答者の年代が幅広いことから、「ほとんどしない・しなかった(1点)」から「よくする・した(4点)」の4件法を採用した。

(4) 成人キャリア成熟尺度に回答してもらった。成人が自分のこれからの人生や生き方、余暇生活などについて、どの程度成熟した考えを持っているかを測定・評価するものとして、坂柳(1999)は成人キャリア成熟尺度を作成した。「人生キャリア」「職業キャリア」「余暇キャリア」の3つのキャリア成熟を測定できるが、それぞれ独立に用いることも可能だとしている。各キャリア尺度はさらに、関心性・自律性・計画性という3つの下位尺度にわかれている。本研究では人生キャリア成熟尺度を用いた。各9項目全27項目あるうち、各下位尺度の因子負荷量が高い方から5つずつ合計15項目を使用した。「全くあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

(5) 対人関係性尺度に回答してもらった。高井(1999)は、現代青年に指摘されている青年期心性を手がかりとし、それらの意識が加齢に伴いどう変化していくのかを概観し、関連する変数の検討も含めて対他的次元における生き方態度を探索的に探っている。「閉鎖性・防衛性」、「ありのままの自己」、「他者依拠」、「他者受容」、「自己優先」の5つの下位尺度からなる。高井(1999)が作成した5つの下位尺度のうち、「自己優先」を除いた4つの下位尺度を本研究では使用した。「自己優先」を削除したのは、Cronbachの α 係数($\alpha = .62$)がやや低めであるためである。また、4つの下位尺度の中でも信頼性の低い項目は除いて、合計19項目を使用した。「全くあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(5点)」の5件法で回答を求めた。

(6) 家庭生活における気持ちと行動に関する質問項目について、筆者の作成した質問項目5つを使って回答してもらった。質問項目は「ボランティア活動や社会的活動あるいは自己向上努力をしている(以後、「社会的活動」と呼ぶ)」、「家事・育児など家庭のことをすることで毎日生活に張りがある(同、「生活に張り」)」、「家事・育児など家庭のことを毎日一生懸命に取り組んでいる

(同,「一生懸命」),「自分のために使う時間が充分にある(同,「充分な時間」)」「夫婦の関係は良好である(同,「夫婦関係」)」である。「ほとんどあてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(4点)」の4件法で回答を求めた。

4. 結果

本調査の対象者の基本属性の詳細は、Table1 のとおりである。

Table 1 調査対象者の基本属性 (単位:人)

		30代 (N=144)	40代 (N=144)	50代 (N=144)	60代 (N=147)	合計 (N=579)
最終学歴	大卒以上	47	31	31	25	134
	短大・専門学校	59	52	58	43	212
	中・高卒	38	61	55	79	233
職業	専業主婦	110	90	104	133	437
	パート・アルバイト	34	54	40	14	142
子どもの数	なし	35	21	16	12	84
	ひとり	50	40	25	24	139
	2人	48	64	74	77	263
	3人以上	11	19	29	34	93
夫の年収	400万円未満	37	36	37	58	168
	400～600万円	60	44	19	34	157
	600～800万円	24	30	29	10	93
	800万円以上	9	23	39	14	85
	答えたくない	14	11	20	31	76
本人の年収	なし	96	74	88	48	306
	130万円未満	42	61	43	75	221
	130万円以上	2	6	11	17	36
	答えたくない	4	3	2	7	16

各尺度の構成と、平均値・信頼性の検討

本調査では、むなしさ尺度(中年期女性版)、人生キャリア成熟の項目、個人目標の価値志向の項目、対人関係性尺度を使用した。それぞれの尺度や項目の構成と平均値・信頼性の検討について述べる。

むなしさ尺度(中年期女性版)

既出の予備調査において、Table2 のとおりむなしさ尺度(中年期女性版)を作成した。今後はこの尺度をむなしさ尺度と呼ぶ。本調査では、「8 ふと孤独だと感じることもある」のみが、最も高く負荷する因子が「空疎感」から「自己に対する無価値感」に変わっていた。そこで、今回の対象者に合わせてその項目のみ所属する下位尺度を変更した。下位尺度の名称は、予備調査と同じである。なお、むなしさ尺度の各因子の信頼性を Cronbach の α 係数によって求めた。全体(M

= 105.08, SD=28.98)の α 係数は.96, 第1因子「無価値感」(M=37.96, SD=12.06)では.94, 第2因子「無目的感」(M=39.39, SD=10.22)では.91, 第3因子「空疎感」(M= 27.73, SD=9.76)では.91であった。

Table 2 むなしさ尺度(中年期女性版)の因子分析結果(主因子法、プロマックス回転)

項目内容	I	II	III
I. 自己に対する無価値感 ($\alpha = .94$)			
20. みんなが冷たい目で私を見ているようだ	.84	-.28	.21
19. 自分が欠点だらけの人間だと思う	.80	.04	-.13
14. 自分はよく仲間外れにされる	.77	-.21	.16
24. 人に良く思われていないと感ずることがある	.77	-.01	.08
25. 自分は価値のない人間だと思う	.75	.13	.02
9. 私は何の役にも立たない人間だと思う	.68	.20	.03
10. 自分のことをだれも気に留めていないと感ずる	.61	.13	.13
6. 自分には能力がなく人より劣っているのではないかと感じたことがある	.59	.29	-.12
2. 私はみんなより劣っていると思う	.54	.31	-.19
16. 私は人よりつまらない人間だと思う	.53	.15	.25
8. ふと孤独だと感ずることがある	.45	-.08	.31
II. 人生の無目的感 ($\alpha = .91$)			
7. 私は将来に希望を持っている*	.00	.78	.00
26. これからの人生はバラ色に輝いていると思う*	.13	.73	-.23
13. 私は可能性に富む人間だと思う*	.27	.72	-.29
1. 自分は将来の目標がはっきりしている*	-.21	.72	.09
29. 自分は将来の目標を達成するためなら、努力を惜しまない*	-.14	.63	.01
28. 私の人生は実に「生き生き」としている*	.09	.61	.02
12. 自分には将来の夢がない	.04	.56	.35
30. 何の目標もなく日々を暮しているような気がする	-.07	.51	.44
27. 自分の将来の目標がよくわからない	.00	.50	.37
5. 毎日ただ何となく生きている気がする	.09	.45	.31
III. 空疎感 ($\alpha = .91$)			
21. 私には興味の持てることはない	.10	-.14	.87
23. 今とくにやりたいことはない	-.15	.14	.80
3. ひまな時間ができて何をしていいかわからない	-.04	-.09	.69
11. 私にはやって楽しいことはない	.17	-.02	.67
15. 毎日が同じことの繰り返しでとても退屈に思える	.06	.05	.65
17. 自分のやりたいことがなんなのかわかりしない	-.01	.33	.60
22. 一人で考え事をしていると急に寂しいと思うことがある	.35	-.16	.52
18. 一人になるととても寂しくなる	.29	-.18	.46
4. 何に対しても意欲がわかないと感ずる	.14	.30	.38
因子寄与率 48.10 7.39 5.81			
因子間相関			
I	-	.63	.68
II		-	.66
III			-

*は逆転項目を表す

人生キャリア成熟尺度

人生キャリア成熟尺度の下位尺度である「関心性」「自律性」「計画性」それぞれ9項目合計27項目に対して因子分析(最尤法)を行ったところ、因子寄与率が1因子目で57.78%であることとスクリープロットから1因子であると確認できた。今後は、成人キャリア成熟尺度(坂柳, 1999)の「人生キャリア成熟」を人生キャリア成熟尺度($M=50.34$, $SD=10.71$)と呼ぶ。また、下位尺度が1因子となったことから、「関心性」「自律性」「計画性」をまとめて人生キャリア成熟と呼ぶ。因子分析の結果は Table3 のとおりである。

Table 3 人生キャリア成熟尺度の因子分析結果 (最尤法)

	I
15 今後どんな人生を送っていきたいのか、自分なりの目標を持っている	.85
8 自分から進んで、どんな人生を送っていくのか決めている	.84
11 希望する人生や生き方が送れるように、努力している	.83
7 人生設計は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている	.82
10 自分が望む生き方をするために、具体的な計画を立てている	.81
5 これからの人生や生き方について、自分なりの見通しを持っている	.80
6 これからの人生で、取り組んでみたいことがいくつかある	.79
1 自分のこれからの人生や生き方には、大変関心を持っている	.77
2 人生設計や生き方に役立つ情報を、積極的に収集するようにしている	.75
14 これからの人生を通して、さらに自分自身を伸ばし高めていきたい	.75
12 充実した人生を送るために参考となる話は、注意して聞いている	.73
13 どうすれば人生をよりよく生きられるのか、考えたことがある	.69
3 自分の人生を主体的に送っている	.69
9 人生で難しい問題に直面しても、自分なりに積極的に解決していく	.62
4 人生や生き方には、自分で責任を持つ	.62
因子寄与率 57.78	

個人目標の価値志向

永久(2010)の家庭内での価値志向15項目の因子分析結果のうち個人目標の価値志向7項目を用いて、本研究において探索的因子分析(最尤法, Promax 回転)を行った。2因子に分かれ、それぞれ「コスト」と「断行」と名付けた。「コスト」とは、自分のやりたいことをお金や時間をかけてでも行う傾向をいう。「断行」とは、自分の目標に価値をおき家族と意見が食い違っても自分の考えで行動をする傾向をいう。因子分析の結果は Table4 のとおりである。

Table 4 個人目標の価値志向の因子分析結果 (最尤法、プロマックス回転)

項目内容	I	II
I コスト ($\alpha = .86$)		
1 自分の勉強や将来の目標のためにお金をかける (かけた)	.87	-.06
4 自分の仕事や将来の目標のための勉強に時間を使う (使った)	.85	.01
2 自分の能力を生かした活動に時間を使う (使った)	.83	.02
3 家族がいても、自分が集中して何かする時間を十分確保する (した)	.42	.32
II. 断行 ($\alpha = .83$)		
7 家族と意見が違っても、自分がやりたいと思ったことはする (した)	-.03	.93
6 家族と意見が違っても、自分が必要だと思ったものは購入する (した)	-.07	.91
5 用事があれば、休日や夜でも家族とは別に行動する (した)	.15	.54
因子寄与率	56.23	18.02
因子間相関	I	II
	I	-.53
	II	-

対人関係性尺度

対人関係性尺度 19 項目に対して最尤法による探索的因子分析を行った。その際、「他者依拠」の「私は自分に対する人の評価はあまり気にしない(反転項目)」の修正済み項目合計相関が .37 であるので、この項目を削除することにした。そして、削除後の 18 項目で再度因子分析(最尤法, Promax 回転)を行い、「他者依拠」の項目のいくつかは他の下位尺度に移動した結果を得た。結果的に、「閉鎖性・防衛性」「他者受容」「ありのままの自己」「他者依拠」の 4 因子に分かれた。因子分析の結果は Table 5 のとおりである。

Table 5 対人関係性尺度 (改変版) の因子分析結果 (最尤法、プロマックス回転)

	I	II	III	IV
I. 閉鎖性・防衛性 ($\alpha = .83$)				
10 私は人に対して心を閉ざしているような気がする	.80	-.02	-.07	.01
2 私は人との付き合いに臆病な方である	.77	.08	-.12	-.02
4 私は人に対して好意的になれない	.67	-.19	.28	.19
7 私は人を信用できない	.60	-.17	.18	.18
11 私は人に批判されると非常に傷つくので、人前で自分の意見を言うことを避けようとしてしまう	.54	.23	-.43	.02
II. 他者受容 ($\alpha = .77$)				
17 私は人の良いところ、すぐれているところを進んでほめる	-.05	.67	.04	-.06
5 私はいつも相手を理解しようと心がけている	.02	.66	.07	-.09
16 私はちょっとしたことで、人に世話をしてあげることが楽しい	-.18	.58	.15	.16
1 私は人のことで、自分のことのように感じるが多い	.04	.57	.20	.11
9 私は人の過ちを気持ちよく許せるほうである	-.16	.50	.03	-.08

12 私は人がどうしてそうしたのかを知ることに関心がある	.12	.45	.06	.16
III. ありのままの自己 ($\alpha = .73$)				
18 私は人とは少しぐらい傷ついても本音で言い合っている	-.19	.07	.67	.25
6 私は少しぐらい傷つくことがあっても、自分のありのままの姿で人と接している	.13	.19	.66	-.14
3 私は人からどう思われようとありのままの自分を生きている	.33	.13	.61	-.32
14 私は自分の弱さや欠点をあまり隠そうとはしない	-.09	.20	.44	.02
IV. 他者依拠 ($\alpha = .76$)				
19 私は何かにつけ、すぐに人と比較してしまう	.10	.04	-.03	.69
8 私は他人より劣っているか、優れているかを気にしている	.16	-.06	.06	.66
13 私は人に自分がどう思われるかということがとても気になる	.09	.23	-.34	.53
因子寄与率 22.89 13.78 8.85 4.03				
因子間相関				
I	-	-.22	-.22	.39
II		-	.18	.11
III			-	-.23
IV				-

世代間によるむなしさの強さの比較

世代間において、むなしさに有意な差があるか、また差がある場合はその下位尺度である「無価値感」「無目的感」「空疎感」の間に有意差があるかを検討する。世代間においてむなしさに有意な差があるか、各世代を独立変数、むなしさの3つの下位尺度合計得点を従属変数として1要因4水準の分散分析を行った。検定の結果、世代間で有意な差が見られた($F(3,575)=15.33$, $p < .001$)。そこで、Bonferroni法による多重比較を行った。その結果は、Table6のとおりである。

この結果から、むなしさの3因子すべてにおいて、60代は他の世代と比べて低いといえる。また、この他「空疎感」においては30代が40代と比べて高いといえる。

Table 6 むなしさの下位尺度得点の比較

	30代	40代	50代	60代	分散分析結果 $F(3,575)$ $p < .001$	Bonferroniの多重比較
無価値感	41.49	39.81	38.91	31.78		30代, 40代 > 60代 ($p < .001$)
	12.50	12.22	11.01	10.14	20.26	50代 > 60代 ($p < .01$)
無目的感	41.28	40.38	39.68	36.29		30代 > 60代 ($p < .001$)
	10.53	9.86	9.82	10.05	6.84	40代 > 60代 ($p < .01$)
						50代 > 60代 ($p < .05$)
空疎感	30.78	27.70	28.27	24.23		30代 > 60代 ($p < .001$)
	9.61	10.13	9.05	9.18	11.76	30代 > 40代 ($p < .05$)
						40代 > 60代 ($p < .05$)
						50代 > 60代 ($p < .01$)

※各数値の上段は平均値、下段はSD

世代間による自分の人生に対する人生キャリア成熟の比較

世代間で自分の人生に対する人生キャリア成熟に差があるかどうかを検討する。全対象者 579 名における人生キャリア成熟は $M=50.34$, $SD=10.71$ である。世代を独立変数, 人生キャリア成熟を従属変数とした 1 要因 4 水準の分散分析を行った。検定の結果, 人生キャリア成熟に有意な差が見られた ($F(3,575) = 5.96, p < .001$)。そこで, Bonferroni 法による多重比較を行ったところ, 60 代 ($M=3.54, SD=0.70$) は 30 代 ($M=3.20, SD=0.69$) に対して 1% 水準, 40 代 ($M=3.30, SD=0.71$) に対して 5% 水準で有意に高かった。

この結果から, 60 代は 30 代や 40 代と比べると人生に対して人生キャリア成熟を有意に強く考えているといえる。

自分の目標に価値をおき行動するかどうかに影響を与える要因と考えられるもの

各世代の主婦が, 自分の目標に価値をおき行動するかに影響を与える要因を検討する。

個人目標の価値志向の得点(「コスト」と「断行」)を目的変数とし, まず全世代において, 対象者の属性・人生キャリア成熟尺度・むなしさ感尺度・対人関係性尺度の下位尺度・筆者が作成した家庭生活における気持ちや行動に関する質問項目を説明変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った。「自分のために使う時間が充分にある」は目的変数の項目に重なるために説明変数から省いた。以下, 「コスト」, 「断行」の順で結果を示す。

全対象者, 30 代, 40 代, 50 代, 60 代の「コスト」を目的変数にした重回帰分析の結果は, Table 7 のとおりである。

「コスト」をかけてでも行う傾向は, 一世代上がるごとに「コスト」得点が増え, 家庭環境としては夫の収入の多さ, 自分の収入の多さ, 子どもの少なさなどから影響を受けることが示された。そして, 人生キャリア成熟が強いこと, 対人関係性が閉鎖的・防衛的ではないこと, 社会的活動や自己向上努力などを行っていることが, 「コスト」をかけることが示された。

ここで, 世代が有意に影響を与えていたので, 各世代についても「コスト」を目的変数にした重回帰分析を行った。Table 7 にあわせて分析結果を示す。

30 代で, 「コスト」をかける人は, 人生キャリア成熟があること, 社会的活動や自己向上努力をすることが影響を与えようと言える。

40 代で, 「コスト」かける人は, 人生キャリア成熟があること, むなしさ感が少ない人が影響を与える。家庭環境としては, 夫の年収が多い人, 子どもの数が少ない人が, また社会的活動などを行っている人が自分の個人目標に価値志向をおく行動をするに影響を与えると言える。

50 代で, 「コスト」をかける人は, 人生キャリア成熟があること, 社会的活動や自己向上努力を行っていること, 家事・育児を一生懸命する人が影響を与えると言える。

60 代で, 「コスト」をかける人は, 人生キャリア成熟があること, 対人関係性において閉鎖性・防衛性が低い人, 社会的活動や自己向上努力を行っていること, 家事・育児を毎日一生懸命に行うこと, 家事育児をすることで生活に張りがあると感じていることが影響を与えると言える。

次に, 全対象者, 30 代, 40 代, 50 代, 60 代の「断行」を目的変数にした重回帰分析の結果は, Table 8 のとおりである。

全対象者において, 「断行」する人は, 人生キャリア成熟があること, 他者の目を気にしない

Table 7 「コスト」を目的変数とした重回帰分析結果（強制投入法）

	全対象者 (N=500)	30代 (N=129)	40代 (N=132)	50代 (N=122)	60代 (N=114)
	β	β	β	β	β
学歴 a	.01 ***	.02	-.07	.04	.04
子どもの数 b	-.07 †	-.11	-.15 †	-.05	.02
夫の年収 c	.07 †	.05	.16 †	.06	-.07
本人の年収 d	.09 *	-.04	.12	.17	.07
パート・アルバイト e	-.05	.08	.02	-.15	-.09
社会的活動	.20 ***	.31 ***	.22 *	.19 *	.16 *
生活に張り	.10	.13	-.25 *	.04	.29 *
一生懸命	.10	-.02	.08	.27 *	-.30 **
夫婦関係	-.02	-.04	-.02	-.10	.06
むなしさ感	-.08	-.10	-.27 *	.06	-.02
人生キャリア成熟	.43 ***	.40 ***	.37 ***	.36 **	.48 ***
閉鎖性・防衛性	-.12	-.11	-.08	.00	-.27 **
他者依拠	.02	.06	.07	-.11	.07
他者受容	-.06	-.06	-.13	.08	-.04
ありのまま	-.02	-.05	.04	-.05	-.02
世代間 f	.09 *				
R ²	.46	.50	.48	.46	.58
F	25.96 ***	7.58 ***	7.10 ***	6.19 ***	9.11 ***

β : 標準偏回帰係数 ***p<.001、**p<.01、*p<.05、† p<.10

a 1=中・高卒、2=短大・専門学校、3=大卒以上

b 1=なし、2=1人、3=2人、4=3人以上

c 1=400万円未満、2=400～600万円、3=600～800万円、4=800万円以上

d 1=なし、2=130万円未満、3=130万円以上

e 1=専業主婦、2=パート・アルバイト

f 1=30代、2=40代、3=50代、4=60代

Table 8 「断行」を目的変数とした重回帰分析結果（強制投入法）

	全対象者 (N=500)	30代 (N=129)	40代 (N=132)	50代 (N=122)	60代 (N=114)
	β	β	β	β	β
学歴 a	-.10 *	-.14	-.18 *	-.07	-.07
子どもの数 b	-.08 †	-.04	-.26 **	-.22 *	-.17 *
夫の年収 c	.12 **	.05	.26 **	.04	.06
本人の年収 d	.03	.04	-.32 **	.18	.19 *
パート・アルバイト e	.06	.07	.48 ***	-.10	-.04
社会的活動	.07	.04	.20 *	-.09	.21 **
生活に張り	.01	.17	-.19 †	-.01	.20
一生懸命	-.11 *	-.14	.02	.02	-.37 **
夫婦関係	.02	.01	-.07	.00	.16 *
むなしさ感	.08	-.23	.11	.25	.17
人生キャリア成熟	.45 ***	.28 *	.50 ***	.56 ***	.40 **
閉鎖性・防衛性	-.05	-.03	-.02	-.08	-.15
他者依拠	-.08 †	.14	-.21 *	-.09	-.13
他者受容	-.07	-.04	-.19 *	-.01	-.14
ありのまま	.15 ***	.08	.22 **	.19 *	.30 **
世代間 f	.79 †				
R ²	.30	.31	.44	.32	.51
F	13.16 ***	3.47 ***	6.01 ***	3.36 ***	6.81 ***

β : 標準偏回帰係数 ***p<.001、**p<.01、*p<.05、† p<.10

a 1=中・高卒、2=短大・専門学校、3=大卒以上

b 1=なし、2=1人、3=2人、4=3人以上

c 1=400万円未満、2=400～600万円、3=600～800万円、4=800万円以上

d 1=なし、2=130万円未満、3=130万円以上

e 1=専業主婦、2=パート・アルバイト

f 1=30代、2=40代、3=50代、4=60代

こと、自分のあるがままを受け入れることが影響を与える。属性として、学歴が低いこと、子どもが少ないこと、夫の年収が多いことが影響を与えるといえる。その他の点として、家事・育児を毎日一生懸命には行わないことが、個人目標の方に価値をおき行動することに影響を与えることが示された。

なお、世代間で有意差が出たので、各世代についても「断行」を目的変数にした重回帰分析を行った。

30代で、「断行」する人は、人生キャリア成熟があることが影響を与えることが示された。

40代で、「断行」する人は、対象者の属性として学歴が低いこと、本人の年収が低いこと、夫の年収が高いこと、何か仕事を持つこと、子どもの数が少ないことが影響を与えることが示された。また、人生キャリア成熟があること、他者の意見などが気にならないこと、他者を受容しないこと、ありのままの自分を受け入れることが、自分の考えで行動することに影響を与えることが示された。

50代で、「断行」する人は、子どもの数が少ないこと、人生キャリア成熟があること、ありのままの自分を受け入れることが影響を与えることが示された。

60代で、「断行」する人は、子どもの数が少ないこと、本人の年収が多いこと、人生キャリア成熟を持つこと、ありのままの自分を受け入れていること、社会的活動や自己向上努力を行っていること、家事・育児を一生懸命に行わないこと、夫婦関係が良好のことが影響を与えることが示された。

中年期主婦のむなしさに影響を与える変数

各世代の主婦のむなしさに影響を与える変数を検討する。対象者全員において、むなしさ尺度得点を目的変数とし、対象者の属性(学歴・専業主婦かパートか・夫の年収・本人の年収・子どもの数)・人生キャリア成熟尺度・個人目標の価値志向・対人関係性尺度・家庭生活における気持ちや行動を説明変数としたフォワード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析を行った。なお、説明変数を選出する有意水準は5%とした。全対象者、30代、40代、50代、60代のむなしさを目的変数にした重回帰分析の結果は、Table 9のとおりである。

全対象者でむなしさが強い傾向は、人生に対する人生キャリア成熟が低いこと、閉鎖性・防衛性が強いこと、他者依拠が強いこと、夫婦関係が良好ではないこと、「コスト」をかけないこと、「断行」すること、世代が若いこと(60代より50代、50代より40代、40代より30代)、生活に張りがないことが影響を与えることが示された。

30代でむなしさが強い傾向には、人生キャリア成熟が低いこと、閉鎖性・防衛性が強いこと、他者依拠が強いこと、夫婦関係が良好でないこと、子どもの数が少ないこと、ありのままの自己を受け入れることが影響を与えることが示された。

40代でむなしさが強い傾向は、人生キャリア成熟が低いこと、閉鎖性・防衛性が強いこと、他者依拠の強いことが影響を与えることが示された。

50代でむなしさが強い傾向は、人生キャリア成熟が低いこと、閉鎖性・防衛性が強いこと、社会的活動などを行わないこと、他者を受容すること、夫婦関係が良好ではないこと、他者依拠が強いこと、無職であること、生活に張りがないこと、家族の意見と違っても自分のしたいことを

することが影響を与えることが示された。

60代でむなしさが強い傾向は、人生キャリア成熟が低いこと、閉鎖性・防衛性が強いこと、他者依拠の強いことが影響を与えることが示された。

以上から、全世代および各世代に共通したむなしさに影響を与えると考えられるものは、人生キャリア成熟が低いこと、閉鎖性・防衛性が強いこと、他者依拠の強いことであった。それ以外の要因として、全対象者では夫婦関係がよくないこと、お金や時間をかけて自分のやりたいことをすること、家族の意見と違っても自分のやりたいことをすること、生活に張りがないことであった。この他30代特有の要因としては、夫婦関係がよくないこと、子どもの数が少ないこと、ありのままの自己を受け入れることであった。また50代特有の要因としては、社会的活動を行うこと、他者受容しないこと、無職であること、生活に張りがないこと、家族と意見が違っても自分のやりたいことをすることであった。40代と60代では、共通した要因以外にはなかった。

Table 9 むなしさを目的変数とした重回帰分析結果（ステップワイズ法）

全対象者 (N=500)		30代 (N=129)		40代 (N=132)		50代 (N=122)		60代 (N=114)	
Step 8	β	Step 6	β	Step 3	β	Step 9	β	Step 3	β
人生キャリア成熟	-.43 ***	人生キャリア成熟	-.46 ***	閉鎖性・防衛性	.47 ***	人生キャリア成熟	-.60 ***	人生キャリア成熟	-.51 ***
閉鎖性・防衛性	.33 ***	閉鎖性・防衛性	.32 ***	人生キャリア成熟	.46 ***	閉鎖性・防衛性	.27 ***	閉鎖性・防衛性	.33 ***
他者依拠	.21 ***	他者依拠	.30 ***	他者依拠	.22 ***	社会的活動	-.13 *	他者依拠	.17 **
夫婦関係	-.11 **	夫婦関係	-.22 ***			他者受容	.11 *		
コスト	-.09 **	子どもの数	-.12 *			夫婦関係	-.13 **		
断行	.07 *	ありのまま	.12 *			他者依拠	.14 **		
世代間	-.06 *					パート	-.11 *		
生活に張り	-.07 *					生活に張り	-.10 *		
						断行	.09 *		
F(8,570)=155.28 p<.001 R ² = .69		F(6,137)=46.68 p<.001 R ² = .67		F(3,140)=81.17 p<.001 R ² = .64		F(9,134)=55.06 p<.001 R ² = .79		F(3,143)=78.76 p<.001 R ² = .62	

β : 標準偏回帰係数 ***p<.001, **p<.01, *p<.05

家庭生活における気持ちや行動について

むなしさに関係があると思われる、家庭生活における気持ちや行動について5つの質問をした。各家庭生活における気持ちや行動に関する得点を独立変数、回答者の各世代を従属変数とした1要因4水準の分散分析を行った。分析の結果はTable10のとおりである。

結果から、社会的活動・ボランティア活動・自己向上努力などを行っているのは30代より50代や60代の方が取り組んでいることが読み取れる。逆に、家事・育児をすることで生活に張りがあるのと、家事・育児を一生懸命に行っているのは50代より30代の方だと読み取れる。自分のために十分な時間があるかの問いには、50代・60代の方が30代・40代よりあると答える人が多かった。以上を総合すると、30代は家事・育児に忙しいながらもそれらを一生懸命行うために生活に張りがあると感じている人が多いと考えられる。50代・60代は家事・育児の忙しさがひと段落して自分の時間も十分にあり、社会的活動などに取り組む人が多いと考えられる。

Table 10 家庭生活における気持ちや行動の下位尺度得点の比較

	30代	40代	50代	60代	分散分析結果 F(3,575)	Bonferroniの多重比較 ($p < .05$)
社会的活動	1.79 0.72	2.01 0.82	2.08 0.80	2.17 0.86	5.85, $p < .001$	30代 < 50代, 60代
生活に張り	2.69 0.73	2.52 0.74	2.47 0.73	2.56 0.73		30代 > 50代
一生懸命	2.85 0.71	2.70 0.74	2.56 0.71	2.65 0.76	3.82, $p < .10$	30代 > 50代
十分な時間	2.42 0.88	2.61 0.84	2.89 0.73	2.95 0.83		30代, 40代 < 50代, 60代
夫婦関係	2.94 0.89	2.80 0.85	2.75 0.87	2.86 0.87	1.25, n.s.	

※各数値の上段は平均値、下段はSD

社会的行動：ボランティア活動や社会的活動あるいは自己向上努力をしている

生活に張り：家事・育児など家庭のことを行うことで毎日生活に張りがある

一生懸命：家事・育児など家庭のことを毎日一生懸命行っている

十分な時間：自分のために使う時間が充分にある

夫婦関係：夫婦関係は良好である

5. 考察

中年期主婦むなしさと世代間におけるむなしさの相違

本研究では、中年期主婦とむなしさとの関連について検討を行った。その際にプレ中年期の30代と老年期にさしかかるといわれる60代も発達的に比較できるように検討した。その結果、各世代によって3因子各々において60代だけが他の世代より有意にむなしさが低かった。また、世代間により3因子の強さに有意差が出るかということは、40代・50代・60代の比較に関しては特徴的なことはなかった。唯一、「空疎感」において30代は40代よりも有意に強いことが認められた。

中年期主婦である40代と50代が60代よりむなしさを強く感じるのには、問題と目的のところで見たように専業主婦は社会から取り残された焦燥感を感じる人が多いとか自分らしさやアイデンティティを確立できにくくなっているという先行研究の結果(清水, 2004; 永久, 1998; 下地, 2010 ほか)が支持された。日湯・岡本(2008)などからも、空の巣症候群を説明するように子どもの親離れの喪失感という意味では中年期があてはまるだろう。30代もプレ中年期ということで、主婦はむなしさを抱くと推察される。永久(1998)の述べる通り、社会から取り残されたような寂しさや焦りを感じるようだ。また、30代が40代より有意に強く感じた空疎感とは、本研究では「暇な時間が出来ても何をしたいかわからない」「毎日が同じことの繰り返しでとても退屈に思える」などと、自分では何をしたいかわからないという感覚を持つことである。30代の場合、育児をしている人はまだ子どもに手がかかり忙しいものの、「毎日同じことで退屈だ」と感じる主婦もいることが示唆される。その上、30代は本調査対象者の75%が有子であることから、家事や育児以外で自由な時間をほとんど持つことが出来ない人が多いとも思われる。家庭で妻や母親の役割があるのにむなしなのは、30代は家族に振り回されていると感じたり自分のために何かをしたいという欲求が強いのではないかと考えられる。

また、今回の対象者にはインターネットで回答してもらった。30代はインターネットに慣れ

親しんでいる世代であり、対人関係が苦手インターネットに長時間を割きむなしさを感じる主婦が多いのかもしれない。60代でインターネットを使用してアンケートに回答する人は、かつて常勤職に就いていてインターネットの作業に抵抗がなく前向きな人達かもしれない。質問紙を配布する形式で調査を行ったら、結果が違う可能性もあり得る。

むなしさ尺度では、無価値感・無目的感・空疎感と3つの下位尺度に分かれたために年代ごとで質の違うむなしさを感じるのではないかと思われた。しかし、その3つはむなしという一つの概念を測定するものであることを踏まえれば、世代ごとでむなしさの強さが異なることがあってもその質を全部まとめて感じて今回のような結果になったと推察される。

自分の目標に価値をおき行動することに影響を及ぼす要因

次に、世代間で人生キャリア成熟に差があるかどうかについて検討を行った。また、各世代の対象者が、対象者の属性／むなしさ／対人関係性／人生キャリア成熟／家庭生活における気持ちなどから自分の目標に価値をおき行動することに影響を与える要因の検討を行った。

人生キャリア成熟を考えているかどうかについては、60代は30代や40代と比べると有意であった。これは、中年期主婦は、「自分＝個」を確立したい女性が多くなってきているという先行研究の結果(東山, 1983; 高井, 2000; 岡本, 2002)と異なっているといえる。30代や40代は、まだ家事・育児が忙しい人が多いと思われ、自由な時間があまりないために自分のことをじっくり考えるゆとりがないのだあろう。逆に、寿命も延びている現代において、60代は老後数十年をどのように過ごすかということはある意味では中年期主婦よりも切実かもしれないと思われる。

自分の目標に価値をおき行動することに影響を与える要因については、「コスト」と「断行」に分けて検討した。「コスト」・「断行」の順で考察する。

全対象者を考えた時に「コスト」に影響を与える要因としては、自分の収入・学歴・社会的活動・人生キャリア成熟が必要であるということが示唆された。これは「コスト」をかけるには、学歴があるため収入の良い職に就いているからお金に余裕があり、自分の人生をよく考えているからそのための努力をする人であろうことが考えられる。また、世代間で有意差が出たので、各世代についても検討した。各世代で共通していた要因は、人生キャリア成熟がある人と社会的活動などを行っている人であった。人生について考えて自分にとって価値があると思う社会的活動などに取り組んでいることが「コスト」に影響を与えるようである。各世代で共通でない要因についてみると、40代だけが夫の収入が多くて子どもの数が少なくむなしさが弱い人が、「コスト」をかけて自分の目標に価値を置いて行動することに影響を与えるのは興味深い。現在の40代というと、バブル期を20代で過ごした人もいる。お金や時間に余裕があれば、自分の好きなように使うという習慣があり続いているのかもしれない。また、全対象者の時に閉鎖性・防衛性が低い人がコストをかけて行動することに影響を与える要因であると明らかにされたが、この点に関しては各世代で検討した時に60代だけが関連していた。このことは、老年期にさしかかると「コスト」をかけて何かするには他者に対して自分が心を開けるかどうかが重要になると推察される。

「断行」に影響を与える要因について、家庭のことにあまり時間を割かない人で経済的にも恵まれており、自分の人生に対して前向きに考え自分を信じる人がそのような行動をすると考えられる。

次に、世代間でも有意差が出たので、各世代について検討した。全ての世代で「断行」に影響を与える共通する要因は、人生キャリア成熟だけである。30代はこの要因のみが影響を与えることから、人生をより考えている人は「断行」するのではないだろうか。40代・50代・60代でそれ以外の共通の要因は、ありのままの自己を受容することと子どもの数が少ないことが挙げられる。自己を受容し子どもが少なければ、家族の意見に従わなくてもやりたい事をするのだろう。

各世代で共通の要因でないことから特徴的と思われることは以下のように推察する。40代は、自分は学歴が低い人、パートはしているが本人の年収が少なく夫の年収が多い人、他者を受容せず他者の基準などを気にしない人が「断行」している。つまり、学歴が低く自分の収入も多くないが家計は困らないし他者のことを気にしないような人が、家族と意見が合わなくても自分のやりたい事を行うというモデルが推察される。60代は、本人の年収が多く夫とも良好な関係である人が自由な時間が充分になくても「断行」していると考えられる。つまり、夫からも信頼されているし自分の稼いだお金もあるので、気兼ねせずに家族と意見が合わなくても自分のやりたい事を行うことが考えられる。

むなしさに影響を及ぼす要因の検討

最後に、むなしさに影響を及ぼす要因について検討した。全対象者を分析した結果、むなしさが強い傾向には、人生キャリア成熟がない人、閉鎖性・防衛性が強い人、他者依拠が強い人、夫婦関係が良好ではない人、自分の目標に価値を置いて時間やお金をかけてまで行動しない人、自分の家族を気にすることなくやりたい事を行う人、世代がより若い人、生活に張りがない人が影響を与えることが示唆された。つまり、より若い世代で家族のことを気にせず時間やお金はあまりかけないで、自分の人生についてはあまり考えないのにその時にしたいことを行う人が、むなしさを持つと考えられる。他者との接し方においては、あまり心を開かない人や、他者の基準を気にする人がむなしさを強く感じるようである。

世代間において有意な影響があるとわかったことから、各世代についても検討した。各世代でむなしさに共通して影響を与えられると考えられる要因には、人生キャリア成熟を持つ人、閉鎖性・防衛性のある人、他者依拠の人の3つが示唆された。つまり、どの世代も自分の人生についてあまり考えず他者への接し方が閉鎖的・防衛的で他者の価値基準や視線などを気にする人がむなしさを感じるということが推察される。さらに、この他の要因について各世代ごとに以下に述べる。30代では、夫婦関係が良好でないうえに子どもが少なく状況をも含めて自己を受け入れる人がむなしさを強く感じるということが明らかになった。また、50代では、家庭のことでは生活に張りがない上に夫婦関係が良好ではなく、他者を受容する人、そして自分のやりたい事を行うにもかかわらずパートや社会的活動などを行わない人がむなしさを強く感じると思われる。40代と60代のむなしさに影響を与える要因に関しては、各世代共通の既述した3つの要因だけであった。

これらのことから、中年期主婦のむなしさに影響を与える要因として考えられるものは、個人の属性よりも考え方や生き方がむなしさを規定するのではないか。そして、考え方や生き方はある程度個人によるといえるが、発達心理学的にみると既述した先行研究(高井, 1999; 岡本, 2002; 田熊・伊藤, 2008; 高井, 2011)も述べているように、世代ごとに変化していくことが考

えられる。したがって、中年期主婦の精神的健康をむなしさの観点で検討すると30代、40代、50代はそれぞれ60代に比べると有意に強いのであろう。

6. まとめと今後の課題

本研究では、中年期のむなしさとそれに影響を与える要因を検討した。幅広い意味で30代から60代までを調査対象者とした。その結果、60代が他の世代と比較して有意にむなしさが弱かった。また、各世代でむなしさの質を比較しても、30代が40代より「空疎感」が強い以外は異なることはなかったことがわかった。人生キャリア成熟も、60代が他の世代と比較して有意にあることが明らかになった。そして、自分が価値をおいた目標に対して行動をとるかどうかなどということに、どの世代においても人生キャリア成熟が必ず影響を与えることが示された。また、むなしさに影響を与える要因としては、どの世代も人生キャリア成熟と他者への閉鎖性・防衛性態度と他者の考え方の基準を気にするかどうか明らかになった。従来の中年期女性の精神的健康に関する研究はGHQを用いた総合的な観点からであり、本研究は青年期男女を対象の研究で指摘されていたむなしさの知見を中年期主婦に展開したものと位置付けられる。

本研究の今後の課題は、以下の3点である。第一に、調査は先行研究をもとに筆者が要因と思われるものを用いて質問紙法を採用し、グループを先行研究にならって世代ごととした。少なくとも、コホートを意識した研究がされるとよかったかもしれない。第二に、質問紙法で調査後、特別な回答者と思われる人を選別してインタビューをするとよいと思われる。そうすることで詳細な情報を得られたかもしれない。第三に、インターネットの回答者と、質問紙の回答者との間に違いが存在するかもしれない。今後は以上の点を踏まえて、検討する余地があると言える。

【文献】

- 東山弘子（1983）．8．中年女性にとっての子離れ．氏原寛（編）．中年期のころ．培風館．
- 日潟淳子（2012）．中年期における喪失感、開放感の意識と精神的健康の関連；年代別による検討．神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要，6（1），1-8．
- 日潟淳子・岡本祐子（2008）．中年期の時間的展望と精神的健康との関連；40歳代，50歳代，60歳代の年代別による検討．発達心理学研究，19（2），144-156．
- 平山順子（1999）．育児期における専業主婦の個人化欲求－経済的資源へのアクセス志向性との関連を中心に－．発達研究：発達科学研究教育センター紀要，14，62-77．
- 井口元恵（2011）．中年期女性のアイデンティティ発達に関する考察－非正規雇用就労者に焦点を当てて－．山梨英和大学心理臨床センター紀要，7，34-43．
- 柏木恵子（2003）．家族心理学．東京大学出版会．
- 厚生労働省（2011）．雇用動向調査．
- 真鍋倫子（2004）．女性の就労行動の学歴差－夫の収入と妻の就労－．東京学芸大学紀要1部門，55，29-36．
- 松浦素子（2006）．成人女性のライフスタイルと精神的健康との関連－役割達成感とパーソナリティの観点から－．心理学研究，77（1），48-55．
- 永久ひさ子（1998）．第3章 母親・主婦・妻であること．柏木恵子（編）．結婚・家族の心理学．ミネルヴァ書房．

- 永久ひさ子（2010）． 中年期有子女性における家庭内での価値志向および家庭内役割意識と人生展望感の関連－就業形態による特徴から－． 家族心理学研究, 24（2）, 157-170.
- 内閣府（2006）． 国民生活白書． 第2章 女性のライフサイクルと就業.
- 中川泰彬・大坊郁夫（1985）． 日本版GHQ精神健康調査票＜手引き＞． 東京：日本文化科学社.
- 仲野好重（1997）． 中高年女性のライフコースに関する発達の研究． 大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」, 17, 139-151.
- 岡本祐子（1994）． 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究． 風間書房.
- 岡本祐子（2002）． アイデンティティ生涯発達の射程． ミネルヴァ書房
- 岡本祐子 編著（2010）． 成人発達臨床心理学ハンドブック－個と関係性からライフサイクルを見る－． ナカニシヤ出版.
- 岡崎奈美子・柏木恵子（1994）． これからの女性の生き方についての発達の考察－既婚女性を中心に考える－, 発達研究：発達科学研究教育センター紀要, 10, 73-81.
- 坂柳恒夫（1999）． 成人キャリア成熟尺度（ACMS）の信頼性と妥当性の検討． 愛知教育大学研究報告, 48（教育科学編）, 115-122.
- 清水紀子（2004）． 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ． 発達心理学研究, 15（1）, 52-64.
- 下地久美子（2010）． 専業主婦という生き方をめぐる20年． 女性ライフサイクル研究所, 20, 30-36.
- 総務省統計局（2012）． 労働力調査.
- 田熊昭江・伊藤裕子（2008）． 多重役割に従事する女性の心理的健康－子育て期と中年期を対象に－． 文京学院大学人間学部研究紀要, 10（1）, 121-135.
- 高井範子（1999）． 対人関係性の視点による生き方態度の発達の研究． 教育心理学研究, 47, 317-327.
- 高井範子（2000）． 実存分析的視点による生き方態度の発達の研究II－PILと自己受容による検討－． 大阪大学教育学年報, 5, 59-70.
- 高井範子（2011）． ポジティブな生き方態度の形成要因に関する検討． 太成学院大学紀要, 13, 79-90.
- 束原麻奈美（2003）． 中年期女性のアイデンティティ研究に関する一考察－結婚・夫婦関係を中心に－． 東京大学大学院教育学研究科紀要, 43, 165-173.
- 堤雅雄（1994）． むなしさ－青年期の実存的空虚感に関する発達的一研究－． 社会心理学研究, 10（2）, 95-103.